

## 西田直二郎とヨーロッパ留学

齊藤利彦

はじめに

戦前から戦後にかけて京都帝国大学国史学第一講座を主宰した西田直二郎は、文献史学の方法論のみにとらわれない「西田文化史学」を樹立した歴史学者である。この文化史学は文献史学を軸としながら、民俗学・国文学・考古学・神話学・地理学・人類学、さらには唯物史観をも包括するものであった。<sup>①</sup>

西田文化史学の確立を考える際、看過できない要素として、大正九年（一九二〇）一〇月から同十一年（一九二二）一二月までの約二カ年にわたるヨーロッパ留学があげられる。彼は史学研究法・史学方法論の研究のため、国費で、イギリスのケンブリッジ大学、ドイツはベルリン大学などに留学した。ケンブリッジ大学では、バリーによる近世史の講義よりも、社会人類学者ハッドンやリバーズの講義を喜んで聴講したという。<sup>②</sup>

ハッドンらの講義を受講したことにより、西田は人類学が歴史学、特に古代史研究を革新させる重要な方法と確信した。<sup>③</sup>この点について、彼はつぎのように語っている。

Social Anthropologyという講義題目は、目を新しく惹くものであった。このころ、フレイザーはリバプール大学に移っていたが、ハッドンや、リバースが社会人類学を講じていた。リバースのポリネシアやメラネシアの宗教・社会とその歴史の講義や講演を私等は事新しくも聴いていたのであった。(中略)これがもたくなって英国に渡り、この大学に留まることとなり、社会人類学なるものが古代史研究に近接する可能をいよいよ明らかに観たのであった。<sup>4)</sup>

西田が受けた彼らからの影響については、高取正男が、

大正九年から十一年までのヨーロッパ留学中、とくに英国ケンブリッジ大学人類学教室のハッドン教授 A.C.Haddon から学ばれた問題意識は、先生の後半生のお仕事のなかで大きな位置を占めている。<sup>5)</sup>

と指摘するとともに、

民族学や民俗学の知見にもとづいて歴史をみなおす西田先生のお仕事は、昭和五年に発表された「日本上代のトーテムズム痕跡の問題と呪術についての二三の考」(論文集『日本文化史論考』所収、昭和三十八年、吉川弘文館)にはじまり、晩年、最後の論文となった昭和三十四年発表の「咲く花の呪術―詩歌詠出以前のもの」(同上書所収)までつづいている。<sup>6)</sup>

とのべている。高取は西田が最後の論文を書き上げたところに「いまに日本にも民族学や民俗学をたいせつにするときがきますといわれたのを、昨日のここのように憶えている」と回想しているが、この言葉は西田の学問の核を考えるうえでも示唆を与えるものであろう。<sup>7)</sup>

西田は民族学、民族誌的研究を用いて日本の古代を考えようとしたが、その具体的所産が代表的著作『日本文化史序説』の第四講である。<sup>8)</sup>この講ではハッドン、リヴァースの所説を積極的に用い、比較民族学的方法によつ

て日本の古代文化を考察している。<sup>9)</sup>

また拙稿で言及したように、西田は田楽を中心とした民俗芸能の記録映像撮影を昭和八年以降三カ年にわたり実施している。<sup>10)</sup> 記録映像の撮影というフィールドワークを実施し、芸能の資料化を意図したが、この構想はすでに、大正一五年（一九二六）段階で企図していた。<sup>11)</sup> 西田が影響をうけたハッドンは、明治三二年（一八八九）にケンブリッジ大学調査隊を結成し、オーストラリア北方に位置するトレス海峡の島々の住民調査を行い、そのおり民族誌の映像を撮影するなどした。したがって、西田の記録映像撮影の発想はヨーロッパ留学、特にハッドンらの講義などから得たものと考えられる。

このように、西田のヨーロッパ留学は彼自身の研究方法論を確立するうえで、重要な基点と指摘できよう。しかし、近年高まりつつある西田への言及のなかでもあまり注目されず、その内実は明らかにされていない。留学中の修学過程や人的交流などを解明することは、西田文化史学を問ううえで看過できない。しかし残念ながら、留学中のこれらの状況などを知りうる史料などは残されていないようであり、判然とはしない。ただ幸いにも、西田が帰朝後に行った講演の講演録と思われるものや、留学先から妻に宛てた手紙が一部活字化されており、さらに新出の手紙の下書きと判断される資料も今回確認された。<sup>12)</sup> そのため留学中、彼がどのようなものを見、どのように感じ、どういった留学生活を送ったのかなどを裏付けることはでき、西田のヨーロッパ留学の一端を明らかにすることはできる。

そこで本稿は、西田が在外研修関係の史料を紹介・分析し、そこから西田のヨーロッパ留学二年間の生活や心情、留学の成果などを検討することによって、「人間」西田とその学問について、探求していきたい。

## 一 西田と在外研修

### 1 渡欧前後の西田

西田は明治四〇年（一九〇七）九月、京都帝国大学文科史学科に入学、同四三年（一九一〇）七月に首席で卒業した、史学科第一期生である。九月に京都帝国大学大学院に入学、同時に副手に任じられた。研究課題は「日本文化史」で、内田銀蔵・三浦周行・原勝郎がその指導にあたった。

大正四年（一九一五）九月、彼は京都帝国大学文科大学講師を嘱託され、同八年（一九一九）六月、京都帝国大学助教授となった。翌七月に国史学第一講座を主宰する内田が急死したため、その講座を喜田貞吉とともに分担し引き継ぐこととなる。当時の官立大学では、助教授が教授に昇進する前には必ず一度、海外研修を経るという慣習があったため、西田も同九年（一九二〇）五月二二日に満二年の海外研修を命ぜられた。留学先はイギリス・ケンブリッジ大学、ドイツ・ベルリン大学などである。<sup>(16)</sup>

## 二 西田と船上での四〇日

### 1 船上への手紙

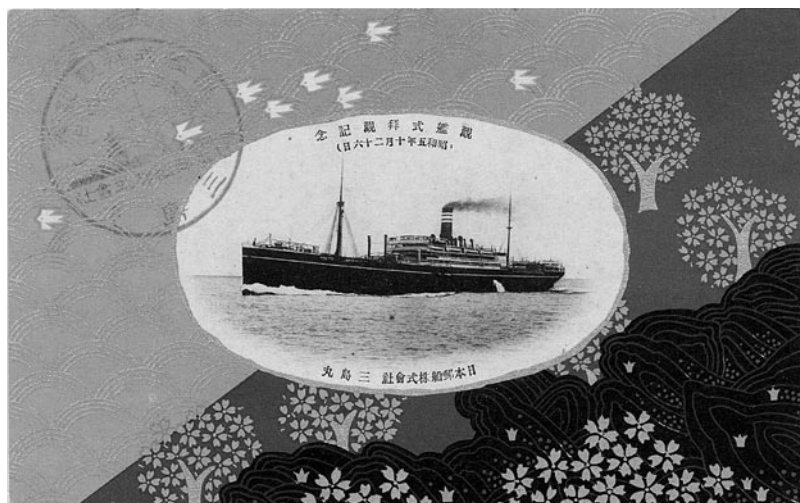
大正九年十月七日、西田は国史学第一講座分担を免ぜられ、渡欧船日本郵船三島丸で英国に渡航した。彼が乗船した三島丸は、明治四一年（一九〇八）二月二五日、神戸川崎造船で建造、造船された欧州航路船で、昭和六年（一九三一）係船、同九年（一九三四）三月三一日、売却（スクラップ）されている。

現在、同年の乗船名簿や欧州航路の日程は残っていないため、詳細は不明である。ただし、同時期の航路スケジュールは通常五年ほど変更していないことを勘案すると、寄港地は横浜を出航後、神戸、門司、香港、シンガポール、ペナン、コロンボ、スエズ、ポートサイド、マルセイユ、ロンドン、アントワープで、約四〇日間の船旅であったと考えられる<sup>(17)</sup>。

さて、同一〇年（一九二二）二月一二日付のケンブリッジから妻に宛てた手紙には、

出発前御存じの通り休養なしに頭と身体をつかつたま、飛び出したものですから、私は船の上で今までのつかれが出やしないかと云う懸念を持つてゐました。恐らくあなたでも出発前後のかの有様ではそう云う恐れをいだいたでせう。其れで出来るだけ船中で休養することを考へたのです。夜も出来るだけ早く寝ることにし、昼は甲板で運動遊戯で時を費すやうにしました<sup>(18)</sup>。

とあつて、十分に渡欧の準備期間もとれないままでの出発であつたことがうかがえる。



日本郵船三島丸  
(昭和5年10月26日観艦式拝観記念ハガキ 筆者蔵)

この時期の西田は確かに公私ともに多忙を極めていた。上述のように大正八年六月、助教授に任じられるが、翌月に内田銀蔵が急死、そのあとをうけ国史学第一講座分担を命ぜられるとともに、一二月からは龍谷大学講師を嘱託されていた。また前年の同七年(一九一八)から、京都府より京都府史蹟勝地調査会の調査員を委嘱され、実質的な責任者として、京都府下の史蹟の調査に従事、同八年六月に報告書の第一冊目を世に出し、同九年三月には第二冊目を刊行している。さらにこの年には、東京帝国大学教授の大西祝の長女道子と結婚し、南禅寺近くに居を構えた。おそらく、渡欧直前までさまざまな仕事に従事し、準備などは妻にまかせたままであったのではなかろうか。

西田は船上から前年に結婚した妻道子に手紙を出さなかったようで、妻からの正月一日付の手紙で「手紙をかくてくれぬ」とかなり批判されている。<sup>20)</sup> この批判の背後には大阪の実母には手紙を送っていたことが発覚したことも関係しているだろう。

実際、西田が妻に手紙を出したのはケンブリッジに落ち着いてからのことで、船上からもロンドンからも音信不通であったようである。妻の批判に対し、「僕はなかなか呑気ではありません。毎日可成り苦しんでゐます。手紙を書かないのは実際に書くことよりも却ってつらいと思ふてゐます」と釈明しながら、

大阪の方には母が年によつてゐて西洋についても十分確かな知識を持つてゐませんから、又御承知の如く私が西洋に行くことを何等故障も云わずに承知してくれたのは奇蹟と思ふ位でありますし、老人のことですから無茶な心配もしてゐると思ふて手紙を出して慰めたのです。<sup>(22)</sup>

とあるように、老母へはそのいたわりから手紙を出したのであり、「大阪の方のこと何分にも氣をつけて下されたい」と依頼している。

西田は明治十九年（一八八六）一二月に父弥三郎、母たねの五人目の子として生まれた。弥三郎は芝居や遊芸を好み、諸芸をよくした人であったが、どのようなきさつからは不明だが早くに家をでたという。そのため、西田は母とともに二〇歳ほど年の離れた長兄の菅原正隆の世話になった。それだけに年老いた母のことが案じられたのであろう。<sup>(23)</sup>

母には手紙を差し出し、妻には出さなかった西田だが、実は何度か妻にも手紙を認めたり、船上で撮影した写真を送ろうとしていた。ただ三島丸では、三人ひと部屋であったので「一人静かに手紙など書いてゐるやうなこと」ができず、たまたま手紙を書いていると「時々ゴツタガエシをするから知らぬ間にどこかに行つてしま<sup>(24)</sup>い、あるときは、

船の上でとった写真を貴方に送つて上げやうと思ふて、其の裏に色々書いて印紙さへ張ればよいやうにして置いたのを、わざわざとり出して何処かにやつてしまった。多分赤松君が故意か不注意かにどうかしたので

あろうと思ふてゐる。<sup>(15)</sup>

というような次第であつた。この「赤松君」とは同船した赤松智城のことである。西田は赤松のほかにもうひとりと同室であつたが、その人物については不明である。ただし、西田と第三高等学校の同級生であり、大学の同級でもあつた宇野円空も同船しているので、おそらく、この三人で約四〇日、ひと部屋で共同生活をしたのではなからうか。同級同士であつたため「三人が一所でワキワキとやつてゐるので船の中は無茶無茶で」あつたが、一方で「お陰で長い無聊な航海中、神経衰弱にもならず無事」に済んだ。<sup>(16)</sup>

乗船中、西田は恩師で急死した内田銀蔵の伝記のことや他の原稿執筆を予定していたが、船が揺れたり、船そのものに慣れないこともあり「大いに苦し」んだ。シンガポールにつくまでは内田の伝記執筆をしていたが、気候の変化もあり執筆を断念、その旨、原勝郎に手紙で連絡している。以後はインド洋航海となり、コロンボを過ぎる頃には暑さにまいってしまい、「一時も早く目的地につくこと」以外は願わず、スエズあたりでは「航海がいやで、皆乗客も振り切つて湊から船をのりかへて日本に帰りたく」なつたと心情を吐露している。<sup>(17)</sup>

とは言いながら、「湊につくと見物に忙しく少しもひまもなくかけづり廻る」ほど寄港地を見物している。

彼の欧洲に到ります要路の支那、シャンハイ、シンガポール、コロンボ等によりまして、所々を見物いたしました。<sup>(18)</sup>

とあるように、上海やシンガポールなどの三島丸の寄港地各地に上陸し、見物に励んだ。

西田は寄港地の史蹟などの見学を楽しんだが、上陸地によっては「土地不案内」をいいことに「一二丁先に見えてゐる所をばわざ／＼一里も二里も走つて賃金をむさばらうとする」人力車夫にであひ、往生したこともあつたようである。<sup>(19)</sup>



このような船上での生活を経て、西田はイギリスで史学方法論の研究を中心とした在外研修にはいるのである。

### 三 イギリスでの生活

#### 1 ロンドンの印象

西田がイギリスに到着したのがいつごろであったかは定かではない。ただ、当時のインド洋経由の渡欧船の航路が約四〇日であったことを考えると、一月末から一二月のはじめであったと考えられる。当初はロンドンに滞在し、ロンドン大学で研修を行ったようであるが、その詳細は不明である。到着第一日目は「非常に鬱陶しい日」で「細かい雨が降ったり止んだり」といった天候だった。<sup>(30)</sup>

その日、西田は午後五時頃に下宿に到着したようであるが、おかみさんをはじめ下宿の皆は、以前より予約していた歌劇観劇に行ったため、下宿人「新米」の彼はひとりぼっちとなった。そこで西田は午後「九時頃、思い切って町を歩いて見やうと思」って、下女に言って、単身夜のロンドンにでかけた。彼は「暗い街を暫く行くと一方に大変賑かに火のついてある通り」があり、そこに行ってみることにする。「商店のある通り」で人が沢山通っていて、夜店が出ていて焼き栗などを売っており、日本でいう露天のようで、「面白いことだと思ひて」見物し、一〇時頃に下宿へとむかった。

この帰路のなかではえましい事件が起こる。西田自身、「探偵小説とも冒険小説とも言へぬ一種の面白い」経験とのべているが、迷子になってしまうのである。夜更けに「全く何もかも分からぬ土地で言葉も通らぬかも

知れぬ」ので、あらかじめ角に目安をつけ「灯の賑かに付いてゐる町」に出かけたのであったが、戻ってみると、思っていた角、思っていた下宿が見当たらない。そこで見当をつけ、ここだと思った家の錠穴に鍵を差し込むが開かない。そこで暗闇に乗り、隣家という隣家の錠穴へ片っ端に鍵を差し込んでいった。そうしていると、通りがかった若い女性が「あなたはこの家から出て行ったのだ」といって、ある家を指してくれた。指示された家の錠穴に鍵をさすとドアは開き、無事下宿の部屋に戻る事ができた。

西田はロンドンに来てまだ三、四時間の自分が声をかけられたことにびっくりしたが、家の下女が余所に行く通りすがりに出会ったのであろうと考えた。しかし、妻への手紙には、「誰かは今に分か<sup>(31)</sup>」らないと伝えると同時に、翌朝、「不思議なベツト」で目が覚めたおり、窓の外の「何とも形容の出来ぬ景色」を見て、迷子の原因は「倫敦名物の霧」で、そのために「隣の柱の色など区別出来」なくなつたのだと考えている<sup>(32)</sup>。

このような不思議な体験をした下宿の詳細は不明であるが、複数階のある建物で、当初は五階に、のちに四階の部屋に下宿している。数人の日本人も下宿していた。四階にあった西田の部屋はベツトルームのみで、「広いからそこで机など置いてはあるが、矢張りどうも片付ないやうな気がして読書などは不愉快<sup>(33)</sup>」で、加えて、下宿のおかみさんが使用人ひとりを雇い切り盛りしていたが、使用人を「叱りながら追い回す」ので「万事が心地よく行か」なかつた。

このようなためか、ロンドンの印象はよくなく、ケンブリッジに移ってから同地と比較して、「こゝに来て倫敦を考へると、今までよくあのような処に居たと思<sup>(34)</sup>」うと感想をのべている。

到着早々の迷子という、留学初日の「戸まどいは第一の失策<sup>(35)</sup>」あつた西田だが、大正一〇年二月一六日付の妻道子宛書簡では、「まるで東京にでも行つた氣に」なり、ロンドンで「少しも不自由を感じ」がなかつたとも

書いている<sup>(36)</sup>。それ相応に環境に順応した様子がうかがえるが、そのためであろうか、カメラを購入するなどして  
いる。しかし多忙で写す時間もなく、「日曜などは大抵朝から晩までドンヨリとした日で写真写すに光線が足り」  
なかった。ロンドン特有の濃霧は到着第一日目の印象だけではなく、西田の記憶に刻まれることになる<sup>(37)</sup>。

ところでロンドン滞在中に、パリから羽田亨より手紙が届くなどの交流がなされている。羽田は「君は今頃あの  
暗い廊下を足さぐりで歩いてゐるのであらう」と「ヒヤカ」しの手紙を寄こしたようである。この暗い廊下と  
いうのは、ロンドンの下宿の廊下は人の動きがなくなるとガス灯を消してしまったため、真っ暗となり部屋に戻る  
のがひと苦労だということを意味している。西田もうつかり蠟燭とマッチを持参せずに外出し、日暮れに帰宅し  
た際には「暗い家の内をよく四這いにならなければかりにして自室に」<sup>(38)</sup>帰ったこともあった。そのため「羽田さん  
も矢張り閉口した経験がある」のだろうと妻に伝えている<sup>(39)</sup>。

## 2 ケンブリッジでの生活

西田がロンドンからケンブリッジに移ったのはいつ頃であるのかははっきりしない。ただ二月一二日付の手  
紙ではすでに同地に滞在しているため、二月までには移り住んだものと考えられる。

先述したように、同地での生活は大変心地よかったものとみえ、「剣橋は実によい処」で「空気のよいこと景  
色のよいこと、人情の美しいこと、凡て感心」し、同地に来て「初めて自分の時間と云ふのを見出」し、下宿先  
で「スツカリ落付」いたので「読書もし」、「かきものもしやうと思」うし「是からは便りを出来るだけ規則正し  
く」差し出すと妻に述べている<sup>(40)</sup>。

ケンブリッジでの下宿は、新聞社の印刷の技師宅で、主人夫婦と六歳半の女の子、姪っ子の計四人が暮らして

いた。西田は南向きの居間を使用した<sup>(4)</sup>が、家具が適切に配置されているうえ、暖炉もあり、妻の道子から送ってもらった高雄の絵葉書などをならべた。また二階には小さいながらベットルームが用意されていたが、箆箆や洋服を吊り下げる押入れ、洗面台など、全てきれいなものが揃えられていた。

彼はケンブリッジの下宿を大変居心地のよいところと思っていたが、そのような感覚はケンブリッジという土地自体にも及び、この地が人情が敦厚で日本とよく似ていると感じていた。

倫敦に居ると日本と生活がよほど違つてゐますが、こゝでは凡そのびやかで神経衰弱などにはなりません。倫敦に居ると喧噪と塵埃とに気も心も疲れるやうに思ひますが、こゝは日本と同じやうに思はれます。

とのべ、町も大学生中心で、講堂に入るときは黒い衣のようなガウンを着、夜間は必ず着用しなければならず、角帽を被っている。「倫敦大学は普通の服を着てゐる」がケンブリッジ大学の「学生は美しく上品なのが多」く品位を重んじ、酒場やカフェーには入らないので、この町にはそうゆう類の店が発達していない。さらにこの町にいる日本人は留学生ばかりで、やはり堅実に勉強しようとする人が多いなどと手紙に記している。日本に似た気風と感じるなか、リラックスした心持ちで過ごしていたことがうかがえる。

また、三月三〇日にはケンブリッジ大学対オックスフォード大学のレガッタ、いわゆるザ・ボートレースを見物しにロンドンまで出かけている。この年はケンブリッジ大学が勝利したが、妻に「自分の関係ある劍橋大学が勝ったので矢張り愉快」で、「二、三日前にまとめて送った新聞(絵入りの)に両大学競漕の絵が随分と盛」んに掲載されているので、「これはどうか永く記念にのこして置いて」ほしいと申し付けている。

このように、西田はケンブリッジ大学を中心とする、この街の恵まれた環境のなかで留学生生活をおくり、ハッドンらの講義を受講して影響をうけながら、自らの学問を深化させていったと考えられる。

ところで、大正一一年四月一〇日付妻道子宛書簡をみると、今後の留学先や日程に関しての予定を伝えているので興味深い。

僕はこの六月中は英国に居り、七月の中頃に大陸に渡るつもりです。独乙が大方落付き、大学も日本人を優遇するそうだから独乙を先にし、仏蘭西を後にするつもりです。多分七月中旬英国を出発し、巴里に立寄り、巴里の日本人の状況を一寸見、其から戦争の跡を見て和蘭からか又は仏蘭西からか何れかの道により独乙伯林に行きたいと思ひます。伯林は寒いから冬にならない先きに伯林に入りたいと思ふから、冬は南の方に転じて寒い時節を越したい<sup>(15)</sup>。

七月までにイギリス・ケンブリッジ大学での留学を終え、ドイツ・ベルリン大学に移るが、それにあたり、パリからオランダ經由か、パリ經由でドイツ入りしようと考えていたことがわかる。実際に西田がどのようなルートでベルリン入りしたかは不明である。どのルートにせよ、西田はパリに寄って、日本人の状況や戦争の跡などをこの目で確かめようとしていた。当時のパリは、第一次世界大戦が終了してから三年。パリ講和会議が開会されベルサイユ条約調印・発効から約二年。いまだ戦争の爪あとは大陸を被っていた。西田はその姿を直に見て廻りたいと考えたのであろう。

## 四 ドイツ・ベルリンの西田

### 1 ベルリンでの生活

西田がいつベルリン入りしたか判然とはしない。大正十一年一月二日付書簡の下書きが<sup>(46)</sup>残されているので、予定通り同一〇年七月中にイギリスを發ち、パリなどを踏査したのち、同年秋、あるいは冬にはベルリン入りしたものと考えられる。

当時、日本の若手教授・助教授や、就任予定者はこぞってドイツに留学している。この時期のドイツはベルサイユ体制化のハイパーインフレに襲われていたが、逆に留学生にとつては生活を送るにしても、また書籍を買い求めるにしても好条件であった。同時期に京大関係者でドイツ留学を果たしているのは、西田をはじめとして、山内得立、九鬼周造、田辺元、三木清、朝永三十郎、天野貞祐、植田寿蔵、務台理作、和辻哲郎、三宅剛一、三浦周行などである。<sup>(47)</sup>

西田のベルリンでの下宿先はグレーベル夫人宅であった。婦人の詳細は不明であるが、几帳面で昔気質な性格であつたらしい。妻への手紙には「独乙風に尊敬されるのはよいけれど何分和製のことに窮屈に閉口」するし、「変な恰好もして居れず、やりきれ」ず、夫人の孫娘に「プロフェッソルはまだ寝てゐる」と朝寝を指摘されることがあつて「いくらプロフェッソルでもこの寒い朝は矢張り寝ぶたいワイ」とおどけながら伝えている。<sup>(48)</sup>

先述した書簡下書きでは、ベルリンの大晦日と正月の町の情景などを詳細に書き綴っているが、そのなかで、

彼自身の身边について、三一日に銀行で一〇ポンドを七五〇〇マルクに換金し、「懐前あた、かくなつて正月を迎へるだけの準備が出」き、そのまま大学横の本屋に向かった。その本屋では目ぼしい本に出会わなかったようだが、「日本人が何か書物を買つて」いるのを見つけ「何処に行つても日本人を見る」が、西田は大学の近辺の町の書肆にも寄ろうと考え、お昼時でもあったので「アカデミッシュ何とか」という地下にある食堂に行っている。というのも、以前より、友人からこの食堂が安価で分量が多いので学生がよく利用するという話を縷々聞いており、一度入ってみようと思ったからであつた。食事をしつつ「静かに周囲を見」まわし、ドイツの学生食堂と日本の本郷の「飯や」や京都の百萬辺付近の食堂、大学の学生食堂を比較すると、ドイツの食堂は「流石に美し」いもので「日本の学生食堂に見るやうな一種のグラーシナイ気と何となく不潔に見えるやうな食器など」とは異なっていると感<sup>(49)</sup>じている。このような感想は、彼の気質の一端を示すものといえよう。

同年二月六日付の書簡下書きの冒頭をみると、

此間からとりまぎれて御無沙汰をしました。びょうきではありません たい忙<sup>マッ</sup>しくて机の前にて手紙をかく  
までに至らないで日か経って行きました。相変わらず寒いので面白いこともありません<sup>(50)</sup>。

とあつて、翌三月三日の書簡の冒頭でも「この間からいそがしく大分くたびれ」てしまい「少し神経衰弱かもしれない<sup>(51)</sup>」、「西洋も大分飽いて」「日本にかへつて温泉にでも入り、一、三日ぐつすりねたいやうな気がする」と記しており、多忙を極め、神経的にまいっていたようである。この時期、ベルリン市内は水道やガスがストライキによって麻痺しており、加えて寒さが厳しく、このようなことも西田の精神状態に影響したものと考えられる。留学の折り返しとなるドイツ滞在中、西田は心身ともに疲れがでてきていた様子をうかがわせるが、その気持ちを和らげたのが、各地の史蹟巡りであつた。後年、『京都史蹟の研究』のなかで、つぎのように端的に語っている。

大正九年に史学研究のためヨーロッパ諸国に留学を命ぜられた時にも、彼の地にあつて史蹟を巡ることによつて故国を離れた私の心を欣ばす所の糧としたのであつた。<sup>(32)</sup>

異国の地で、西田は史蹟を巡ることによつて「心を欣ばす所の糧」としたが、では、どのような史蹟を巡り、何を見、何を考え、あるいはリフレッシュしたのであるうか。

## 五 留学中の史蹟巡り

西田は幼い頃から史蹟巡りが好きであつた。生家が大阪の東部、東成郡清堀村で「少年時代の私はこれら地域の上にある豊かな史蹟から日本歴史の物語をきいてゐた」のであり、史蹟への興味が歴史学を修める「大きな素因」であつた。<sup>(33)</sup>

西田は史蹟を「沈黙する歴史物語」ととらえ「声こそたてないが、人間に感興の深い物語」<sup>(34)</sup>をするものと考えていた。すでにこの時期、京都史蹟勝地調査会の実質的責任者として調査報告書も刊行し、さらには、大正四年（一九一五）には三浦周行の発案で、読史会として、西田と魚澄惣五郎の連名で『修学旅行 京都史蹟案内』を出版している。

彼は三島丸にてヨーロッパにむかう途中の寄港地をはじめとして、留学中、各地の史蹟を訪れている。上陸した寄港地は、先述したように、上海・シンガポール・コロンボなどである。

ケンブリッジ大学在籍中は、イングランド東部のローマ人遺蹟を踏査、イングランド南部を訪れた際はケント州にあるカンタベリー大聖堂の大伽藍、近隣の聖オーガスティン修道院の遺蹟をめぐり、また同州のサンドウィッ



ちあたりの古い街を歩き回るなどしている。ドイツ・ベルリン大学滞在時期には、その地の田舎を巡った。<sup>(55)</sup>

留学最終年にあたる大正一一年（一九二二）は各地を巡ることを目的とし、専念したようである。中東を中心に巡っているが、その理由は、

一等国の文明を離れて、文明、国力には劣りがあるかも知れませぬがやはり夫々特徴を持った一国の文明、一民族の文明が知りたかつたのであります。<sup>(56)</sup>

というもので、「西洋文明の母であると言われる」ギリシア、「東方の文明国」エジプト、シリアなどの文明発祥の地を訪れ、その特徴を肌で感じようとした。特にエジプトでは「文明の起源地」であるナイル河畔やイエス・キリストゆかりのエルサレムを訪れた。

シリアではダマスクスを踏査したが、その郊外にある文化史家トーマス・バックルの墓を訪ねている。この地に対しては、

中世時代に於きまして、欧羅巴の文明が衰へた時この地の文明は遙かに西洋の文明を凌いでゐたのであります。今日に於きましては西洋乃至東洋の人達がこの国の文明を單に低い民族文明だと考へてゐる様であります。すがそう一概に捨て去るものではないと思ひます。<sup>(57)</sup>

という考え方をもち、「シリア、アラビアとそれに英国、独、佛、と我日本の文明が果たして那邊にあるかを熟慮せなければならぬと思」<sup>(58)</sup>い、それぞれの文明ないし文化の相違を正しく把握、理解することが大事であることを強く認識している。

シリア訪問後は再びギリシア、イタリア、南ドイツ地方とまわって、ベルリンに戻り、アメリカを経由して、同年一二月一四日に帰国した。約二カ年に及ぶヨーロッパ留学中、西田がどのような視点からヨーロッパを見、

同時に異国の空から日本を、日本の歴史を見たのか。つぎのような言葉が明瞭にしめしている。

私が国に居りますときにはさほど氣にとゞめなかつたことが国を離れて見ますと極く些細な事でも重大なことに感じられて身にしみてよく解るのであります。丁度白いもの、後に黒いものを置きますとその性質が明瞭に見える様に、日本へ帰つて来ますと益々日本のことがよく解るのであります。

「歴史は野外を歩きながら考えるもの」<sup>(8)</sup>と位置づけていた西田にすれば、ヨーロッパをはじめアジア地域の踏査は、文明・文化の相對、日本史の相對をなす絶好の機会であつたであらう。

同月二八日に、西田は文学部国史学第一講座分担任を復命する。これ以降、少銳の歴史学者として精力的な活動を行つていく。

## 六 帰国後の西田——留学の成果——

### 1 夏期講習会と『日本文化史序説』

ヨーロッパ留学、とりわけケンブリッジ大学で最新の人文諸科学の成果を広く吸収した西田は、帰国後、大正一三年（一九二四）五月一二日、博士論文「王朝時代の庶民階級」によつて京都帝国大学から学位を取得し、同時に教授に昇進する。

同年八月、京都帝国大学夏期講習会で二週間にわたり日本文化史を講じた。この講演はのちの『日本文化史序説』の骨子となるものである。同著は昭和八年（一九三三）に刊行されるが、刊行までに時間が経っているのは、口述

筆記の補修に時間を費やしたためであった。<sup>(61)</sup>しかし、論旨の変更は特になかったようである。したがって、帰国後すぐの講習会の内容は同著から推察することができる。特に民族学・民族誌的知見が反映されているのが、上述した古代史を扱う第四講であった。

この講では日本の古墳の装飾の文様について、ネイティブアメリカンの線画を参考にするなどし、ハッドンやリヴァースの所説を引用して、その意味解釈を試みている。菊地氏も指摘されているように、方法論的に精微さにかける点はあるとしても、民族学・民族誌的比較、考察という方法は、新鮮な古代史研究、ひいては歴史学研究という印象、感覚を聴衆に与えたであろう。<sup>(62)</sup>

## 2 「欧羅巴新婦朝談」について

西田は帰朝後、佛教専門学校の研究雑誌『摩訶衍』第一巻第三号(大正一四年三月刊)に「欧羅巴新婦朝談」と題する小文を寄稿している。<sup>(63)</sup>内容をみると、ヨーロッパ留学中の見聞などが語られていること、口語体文章であること、末尾に「(柴田筆記)<sup>(64)</sup>」とあることから、講演の内容が口述筆記され、それを掲載したものと考えられる。だとすると、講演そのものは大正一三年内に行われたのではないであろうか。

佛教専門学校は大正二年(一九一三)四月五日、高等学院を佛教専門学校と改称し設立された、浄土宗僧侶の養成機関である。昭和二年(一九四九)二月二日、学制改革に伴い、新制「佛教大学」となるまで、三六年の歴史を有した。

同校では研究機関誌『摩訶衍』を発行し、広く宗学、学会に寄与した。本書は、同校の前身、宗教大学分校が校友会の機関誌も兼ねて発行した『鹿溪』、これを引き継いだ第二次『鹿溪』が同九年(一九二〇)一月第七号をもつ

て終わったのをうけ、同年八月に第一巻第一号として創刊されたものである。その後、昭和一四年（一九三九）に『佛專学報』と改称し、宗学のみならず、仏教学、哲学の論叢となり、佛教専門学校が佛敎大学に昇格すると、『佛專学報』は『佛敎大学学報』、さらに『佛敎大学研究紀要』へと引き継がれることとなった。<sup>(65)</sup>

さて、「欧羅巴」新帰朝談の内容は、ヨーロッパ留学での経験などを引き合いにしながら、「この度の旅行いたしました国々が如何なる所であつたかと言ふ事」と「如何なる国々が如何なる事情を背景としてゐたかと言ふ事」を「日本と比較して御話」するといふもので、道德観の問題、個人の自覚、教育と宗教の關係などを論じている。特に明治維新以来、西洋思想をそのまま輸入したことにより、「在来の美しい日本の教育を根こそぎ」にし、それは「形の上のみでなく精神に於きましても同様」で、「西洋の文明についてまだ充分な研究が足りないことに起因」すると論じるとともに、問題は「己人の自覚」「社会道德の訓練」の必要があり、これらは平素よりの国民個人々々の自覚、品性の向上にかかっていると述べたあと、品性の向上にはどうしても宗教上の訓練宗教の力にまたなければならぬと思ひます<sup>(66)</sup>と話をくくっている。

西田は『日本文化史序説』において、「人間的自我」の自覚に精神文化があると主張したが、ここでも「自我・「自覚」の深化と宗教の役割を指摘しているのは注目できよう。

彼がどのような経緯から『摩訶衍』に寄稿したのかは不明である。佛教専門学校では設立当初から嘱託教授に、羽田亨（歴史、英語担当）、赤松智城（哲学、倫理、哲学史担当）を招いており、同書の前身、第一次『鹿溪』創刊号には土田善激、野々村直太郎、後藤澄心、梅崎舜興のほかに羽田も論文を寄せている。<sup>(67)</sup>西田が親しくする先学、同輩が佛教専門学校と關係があり、加えて西田の兄、菅原正隆が住持を勤めていたのが大阪の浄土宗寺院天寧寺であることなどを勘案すると、佛教専門学校から何かしらの依頼があつて講演を行い、その内容が口述筆記され

て『摩訶衍』に掲載されたものと考えられる。

### 3 読史会大会・例会と留学成果

明治四三年（一九一〇）一二月、京都帝国大学文学部では三浦周行を中心とする学生の史料購読の私的集会が発足する。現在でも続く読史会である。西田は発足当初より参加し、ほぼ毎年、大会や例会で発表している。昭和六年（一九三二）、三浦の退官後は同会運営の中心となる。<sup>(9)</sup>

留学より帰国した翌年、大正一二年（一九二三）一二月一日に開催された第十四回創立記念大会で、西田は「欧米人の日本研究」と題する講演を、同一三年一二月一四日の大会では「活動写真と歴史教育」と題した発表を行っている。<sup>(10)</sup> これらの発表は留学先で得た知見を披露したものであった。

前者は留学「本来の目的が日本のことを研究するのではありませんから其間色々と当地の諸氏から見聞」したことや、調査の内容をまとめたもので、『史林』第九卷第一号彙報にその講演抄録が掲載されている。西田は、「欧米人の日本研究は五期に」分けられており、それは鎖国以前、鎖国以後明治維新まで、明治維新、日露戦争、第一次世界大戦以後で、特に大戦後の時期が「悪評の多」い時期でもあり、研究対象となっている。フロレンツは著書『日本及び独逸』で「日本の文明は模倣のみにして創作なし」と指摘し、『日本は如何なる国か』では「日本人と独逸人には類似点なし、彼等は知識的なるも世界文明に貢献せず、我々が日本人より与へらるゝものは裝飾と美術品のみ」と言及していることを紹介したうえで、「欧米にては一般の民衆は勿論識者にも知らるゝ、処少なく」、いまだ岡倉天心の『茶の歴史』や小泉八雲の小説などが愛読されているのみであるから、フロレンツにみるような欧米人の日本研究が「実際の批判的となるたるは喜ぶべきこと」とのべ、「学者は須く我国情及文化

を彼等に紹介すべき」である<sup>(73)</sup>と締めくくっている。

この年の大会では講演以外に三浦周行、工学部教授の天沼俊一、西田がヨーロッパより持ち帰った研究成果、すなわち「日本史に関する、史料欧洲古文书原本影写及び欧米の古文書館の写真印度及び銀蘭の建築写真等」<sup>(74)</sup>が陳列され広く展観された。実に展観者五百人に及んだという。西田が持ち帰った資料がどのようなものであったのかは具体的には不明であるが、講演とともに、これなども西田の留学成果の一端といえるであろう。

また同一三年の大会報告「活動写真と歴史教育」もドイツ留学の成果といえる。『史料』第十卷第一号彙報の発表抄録をみると、西田は「近代人の文化史に対する要求は時代の精神、思想の転変を簡易に手取り早く知らんとするところであつて、その点、活動写真は「現代の歴史研究の趨勢の或る部分文化史教育の一面との接触を可能」とする、と言及し、ドイツの教授の指摘を引用しながら「現代文化生活を表現する機能は何よりも活動写真が最も多」く、第一次世界大戦後、ヨーロッパ諸国がその利用、特に教育方面に活用しているとのべている。そのなかにあつてドイツ、オーストリアの活動写真の活用は盛んで、加えてロシア、トルコ政府も注意を払い、アメリカは流行しているが内容は軽薄と指摘している。翻つてわが国の状況は「真面目に利用殊に歴史教育国民の教化の点に殆んど顧られ」ておらず「文部省推奨の映画も学術的価値」はない、ただ最近は学術紹介目的をもつた会社設立もでてきており注意すべきであるが、「独逸に於けるが如き歴史教育の好映画が出現し得るや否かや疑問」であるとのべ、最後に、

歴史フィルムの作成は経済との問題たると共に亦歴史家責務の問題にして一に今後歴史研究の進歩発展如何に係れるものと云ふべし、<sup>(75)</sup>

といったように、今後の歴史教育や歴史研究の発展は、活動写真の活用や作成にかかっていると言及している。

西田はイギリスでのハッドンらの講義、ドイツでの活動写真会社などの活動などをうけ、記録映像撮影の重要性を把握したものと見え、このことが後述する田楽の記録映像撮影の構想へと結びついたものと考えられる。

さらに、昭和四年（一九二九）一月二七日に開催された読史会例会では、「リーヴァース先生の事ども」と題する発表を行っている。その内容は活字化されていない模様だが、これも『史林』第一四卷第二号に発表抄録が掲載されている。

渡欧中、一九二一年ケンブリッジ大学に於いて研究中、リーヴァース博士に師事した事を思ひ、博士の民俗学研究法に就いて述べ、其指導の学会のこと等より博士の講義著書に及び、社会組織の研究より、民族学方法としての野外探訪、また其論拠たる“exact Method”について論じ、Toda種族の研究方法及History of Melanesian societyの第二卷についての所感を述べて、文化伝播説の民俗学的な解釈を言ひ、日本の民俗研究の希望に言及した。<sup>(17)</sup>

留学中に師事したリーヴァースの民俗学的方法・分析、著作や講義内容などについて言及したうえで、文化伝播の民俗学解釈と日本における民俗研究について希望をのべたことがわかる。回想的内容という側面は否めないが、発表の内容は留学で得た知見の紹介といえ、最新の人文諸科学を吸収した西田のこのような発表は、学生たちにとって影響が大きかったものといえよう。

#### 4 金曜会と西田直二郎

一般に学生たちが大学教員の学問へ身近に接する機会は、その講義であることは今も昔も変わらないであろう。『日本文化史序説』に感銘をうけ、京都帝国大学に入学した和田邦平（昭和一八年卒業）は、西田の講義をつぎの

ように回顧している。

史学科に入学した当時、京大では文化史の学風が旺盛していた頃であつたが、西田先生は公私ともにもっともお忙しい時代で、よく公用御出張があり、お講義も一時間位きつと遅刻して来られるのが通常であつた。しかも皆定刻に机について誰一人私語する者もなく、神妙に待つ教室へヤアヤアと恐縮しながら登壇され、多分原稿用紙に大綱を記されたノートをもつて、しばしばドイツ語が先きにとび出す講述を聴講のたびに、きつとふかい感銘を受けたのは私だけではなかつたようだ。<sup>(78)</sup>

西田の講義は和田も指摘しているように、実質は三〇分にも満たないこともしばしばであり、西田にとって大学の定刻は自宅を出る時刻のことと学生のなかでは噂になっていた。当然、講義はつぎの講義時間に差し支えないよう定刻どおりに終わるので、一回の講義でのノート筆記は一ページにも、時には五、六行にも満たないこともあつた。<sup>(79)</sup>

そのため、知的好奇心旺盛な学生のなかには訪問日として許されていた金曜日を下鴨の西田邸に集い、西田の薫陶をうけた。西田の学問に魅了された学生たち、たとえば肥後和男、池田源太、山根徳太郎などは私的懇談会「金曜会」を発足させ、その後、定例的に活動を行っていくようになる。<sup>(80)</sup> 会の発足には肥後が「先生と失礼ながら膝を交へて談じたい」という希望をのべ、西田はすぐさま賛成し、同時に、つぎのように学生たちに提案した。

単に自分と君等とだけで話することになれば、どうしても話の種が尽き易いし、同じ問題を繰返すことになるから、成るべくいろいろな人に来て戴いて、それを中心にして話そう、<sup>(81)</sup>

こうして、大類伸からはじまり、美術史の源豊宗、国文学・民俗学の折口信夫、哲学の三木清、同じく和辻哲郎といった、錚々たる人物たちが金曜会で講話するようになるのである。しかもその雰囲気は自由闊達で、芸術



鑑賞や民俗探訪も行われた。この会がのちに民俗談話会、民俗研究会となり、さらに京都帝国大学民俗学会へと発展していくのである。<sup>(83)</sup>

肥後は、毎月一回催されるこの会は「大抵十一時過ぎまで熱烈に論じあつたので、銘々聊かの興奮」を残しながら家路についたが、そのおりの気持ちは「今なほ胸にやきつけられて」おり、金曜会の意義がどれだけあつたかは不明だが「少くとも私にとつて、大なるたのしみであり期待で」あつたと、述べている。<sup>(84)</sup> 若き学生たちがこの会に寄せた思い、西田を中心とした清冽な学問探求をうかがうことができよう。

この金曜会では西田のヨーロッパ留学中の見聞なども話題となつたようであるが、ここで注目できるのが、彼がヨーロッパ留学中にこしらえたと推考される写真帖の存在である。<sup>(85)</sup> 革張りの写真帖で表紙表に「ROM」、表紙裏には「EXLIBRIS N. NISIDA」とある票が貼付されている。総数一三六枚の写真は、おそらく、西田が留学中に撮影した写真と推測され、このような写真を用いながら、学生たちに自身が見聞したヨーロッパを語つたのではないであろうか。<sup>(86)</sup>

## 5 田楽の記録映像撮影

西田は昭和八年（一九三三）から三カ年計画で近畿地方の田楽の記録映像撮影を実施している。詳細は拙稿で論じたが、この調査は「近畿地方の民俗学的研究」と題し、服部報公会より補助金を交付されたものである。主な研究課題を「諸社に遺る特殊神事並の農事慣行等」と設定、神事田楽を調査対象として記録撮影を行っているが、<sup>(87)</sup> 神事田楽を通して「神社を中心とする古き村落共同体の生活」を考察する意図があつたものといえる。<sup>(88)</sup> 『ドルメン』第三巻第三号は「京大国史学教室の新しい試み フィルム・ドキュメント」という見出しで、この一連の調査を

取り上げ、

京大国史学教室では昨春来、近畿の民俗調査を教室の事業としてはじめてが同教室の主任教授西田直二郎博士の主張により各神社で行はれてゐる行事を映画によつて記録することに着手、(中略)これまで古文書や絵巻によつては諒解できなかった田楽のデテールがはつきりしたばかりではなく、古代人のいだいてゐた生活感情までが生き／＼と浮彫りされ、史学研究上意外な成果を収め得た。<sup>(9)</sup>

と紹介している。内外ともに「古代人」の生活感情、いわば神事田楽に込めた「精神」を考えるうえでの調査と受け止められていたといえよう。

前述したように、芸能の記録映像撮影の構想は京都府史蹟勝地調査会で行った「御勝八幡宮紫宸殿田楽」の調査終了後、すなわち大正一五年よりもっていた。

昭和八年春爾来これの計画と打合せをしたものであるが―最初の計画はすでに大正十五年かの京都府の調査報告を書くときにあった―このような構想とその実施については、国に於けるFilm Documentについて試みた初めてとしてよからうと思ふ。吾人が先年論じた「活動写真と歴史教育」に於て料を映画の形に於て保存し、その研究を行はんとするの趣旨を実際行したものである。<sup>(10)</sup>

とあるように、ケンブリッジ大学でのハットンや、ドイツ留学中に見聞した歴史フィルムと教育方面への活用の影響をみてとれよう。

近年、これらのフィルムは京都大学総合博物館に保管されていたことがわかり、京都大学が修復作業を試みたが、大半は劣化のため再生が不可能であった。かろうじて現在、平安神宮「時代祭」と京都府天田郡上野条(現福知山市上野条)「御勝八幡宮紫宸殿田楽」を撮影したフィルム二本のみ再生可能である。<sup>(11)</sup>

西田にとって、あるいは西田文化史学において、フィールドワークはその自然や風土を感じ歴史を追体験し、復原するうえで重要な方法であり手段であった。「歴史は野外を歩きながら考えるもの<sup>(9)</sup>」と位置づけていた西田にとって、民俗調査で得た資料は、文献史料と同等の価値をもっていたと考えられる。

現在、民俗学における映像記録については、澁澤敬三とアチック・ミュージアムのメンバーによって撮影された、いわゆる「澁澤フィルム」が学史上、著名であり評価されている。しかし、西田のこれらの調査と記録映像撮影はこれまでほとんど知られることなく、また学史のなかに位置づけられることはなかった。京都における民俗学の形成と展開を考えるうえでも、また日本民俗学、日本史学の展開を考えるうえからも、西田とその調査を位置づける必要があるだろう。

## おわりに

以上、西田直二郎の「文化史学」確立のうえで看過できないヨーロッパ留学について、その断面ではあるが、明らかにした。彼がこれらの学問の方法論を学んだ留学中の修学過程や人的交流を明らかにすることは、「西田文化史学」確立を考えるうえからも重要であるが、残念ながら、史料上の制約から、全面的に、これらの問題を解明するには至らなかった。ただし、西田と同じ便でヨーロッパに留学した宇野円空の留学生活は、彼自身が何も語っていないため判然とはしないことを考慮すれば、一端ではあるが、西田が留学をどのような環境で、あるいはどのような心情で過ごしたかなど、留学の成果の一部を解明できたといえる。

今後の課題は西田に関する史料・資料収集の精度をあげ、彼の言説や知の体系構築の実態や過程などについて、

より考察を進める必要がある。これらの点については別稿を用意している。

# 注

- (1) 西田の生涯と学問に関する研究としては、柴田実・西田朝日太郎編『西田直二郎 西田真次』（日本民俗文化体系一〇、講談社、一九七八）がある。近年、西田に関する研究は民俗学、思想史の立場から盛んになりつつあるが、ここでは、蘇理剛志「京都帝国大学民俗学会についてー関西民俗学の黎明ー」（『京都民俗』第一九号、二〇〇二）、菊地暁a「主な登場人物ー京都で柳田国男と民俗学を考えてみる」（『柳田国男研究』第四号、二〇〇五）、b「京大国史の「民俗学」時代ー西田直二郎、その〈文化史学〉の魅力と無力ー」（『近代京都研究』思文閣出版、二〇〇八。林淳「文化史学と京都」同）などをあげておく。

- (2) 右同、柴田氏論考、四一頁。

- (3) 菊地暁「柳田国男『採集手帖（沿海地方用）』ー「京都帝国大学国史研究室内 民俗調査会」寄贈図書からー」（『静脩』vol.44、1100頁）。

- (4) 西田直二郎「序」、池田源太『歴史の始源と口誦伝承』綜芸舎、一九五六、一頁〜二頁。

- (5) 高取正男『神道の成立』平凡社ライブラリー、一九九三、三一四〜三二五頁。また横田健一氏は竹田聰覚州氏追悼冊子『麗實』のなかで、

西田田先生は一九二〇年に文部省の在外研究員として、イギリスのケンブリッジ大学でA・C・ハッドンやH・R・リーバースについて民族学、文化人類学を研究され、その方法論を文化史学に適用した人である。

とのべている。

- (6) 右同。

- (7) 右同。また大正三年にできた京都帝国大学文学部史学科陳列館の蒐集資料は、三浦周行によって二万点におよぶ古文書が蒐集されているが、西田は「土俗学・民族学関係資料を蒐集され陳列館の新分野を開い」と評価されている（京

- (8) 都大学読史会『回顧五〇年』、一九五九。
- (8) 西田直二郎『日本文化史序説』改造社、一九三二。
- (9) 前掲注(1)、柴田氏論考および注(1)、菊地氏論考b。
- (10) 拙稿「西田直二郎と民俗調査―田楽の記録映像撮影を中心に―」(『佛教大学アジア宗教文化情報研究所研究紀要』第四号、二〇〇七)。
- (11) 右同。なお、人類学、民俗学による映像撮影などについては、村上忠喜、山路興造氏よりご教示を得た。謹んで深謝します。
- (12) 前掲注(1)参照。
- (13) 『摩訶衍』第三卷第二号、一九二二。
- (14) 西田円我編『しのび草』私家版、一九七六。
- (15) 佛教大学宗教文化ミュージアム所蔵「西田直二郎関係資料」(整理中)のなかより二通確認された。一通は大正十一年二月六日、もう一通は同年一月二日である。二月六日分を先頭にグリップでとめてあり、手紙の下書きと推考される。
- (16) 前掲注(1) 柴田氏論考四一頁。
- (17) 日本郵船博物館学芸員野崎利夫氏よりご教示を賜った。謹んで深謝します。
- (18) 大正一〇年二月一二日付道子宛西田書簡(西田円我編『しのび草』私家版、一九七六)七頁。
- (19) 前掲注(1) 柴田氏論考四〇頁。
- (20) 前掲注(18)、一〇頁。
- (21) 右同。
- (22) 右同。
- (23) 前掲注(1)、柴田氏論考三〇頁。
- (24) 前掲注(18)、九頁。
- (25) 右同、九―一〇頁。
- (26) 右同、一〇頁。

- (27) 右同、九頁。
- (28) 『摩訶衍』第三卷第二号、一九二二、一二〇頁。ここで西田は上海に上陸したと記している。大正九年の同船の航海スケジュールが判然としないことは前述したが、西田の言及より三島丸は上海にも寄港したと考えられる。
- (29) 右同、一二一頁。
- (30) 大正一〇年二月一六日付道子宛西田書簡(西田円我編『しのび草』私家版、一九七六)一二一―一四頁。
- (31) 大正一〇年三月一五日付道子宛西田書簡(西田円我編『しのび草』私家版、一九七六)一四頁。
- (32) 右同。
- (33) 右同。
- (34) 大正一〇年二月一六日付道子宛西田書簡(西田円我編『しのび草』私家版、一九七六)一〇頁。
- (35) 右同、一四頁。
- (36) 右同、一一頁。
- (37) 右同。
- (38) 右同、一二頁。
- (39) 右同。
- (40) 大正一〇年二月一二日付道子宛西田書簡(西田円我編『しのび草』私家版、一九七六)一頁。
- (41) 前掲注(31)、一七頁。
- (42) 右同、一八頁。
- (43) 右同。
- (44) 大正一〇年四月二一日付道子宛西田書簡(西田円我編『しのび草』私家版、一九七六)二三頁。
- (45) 右同、二三頁。
- (46) 佛教大学宗教文化ミュージアム所蔵。大正一一年三月三日付道子宛西田書簡(西田円我編『しのび草』私家版、一九七六)二五頁。ちなみに、赤松智城は華族の家に下宿しており「赤松豪傑日本風に時々跳足で上草履をはいて廊下

をある」いて、下宿先の夫人からかわれたりしていたと西田は妻宛の手紙に綴っている。

- (47) 竹田篤司『物語「京都学派」(中央公論社、二〇〇一)、一二六頁―一二七頁。
- (48) 前掲注(46)、『しのび草』二五頁。
- (49) 前掲注(46)。
- (50) 右同。
- (51) 右同。
- (52) 西田直二郎「序」(『京都史蹟の研究』吉川弘文館、一九六二)一―三頁。
- (53) 右同。
- (54) 右同。
- (55) 右同。
- (56) 前掲(28)、一二〇頁。
- (57) 右同、一二二頁。
- (58) 右同。
- (59) 前掲注(28)、一二〇頁。
- (60) 和田邦平「思ひ出すことども」(京都大学読史会『回顧五十年』、一九五九)、三九頁。
- (61) 前掲注(1)、菊地氏論考b。
- (62) 右同。
- (63) 前掲注(28)。記名は「西田直次郎」となっているが、これは単なる誤植であろう。
- (64) 「欧羅巴新婦朝談」末尾に「柴田筆記」とある。柴田氏とは、当時、佛教専門学校で『摩訶衍』の編集に従事していた柴田憲道氏と考えられる。
- (65) 佛教大学史編纂委員会編『佛教大学史』佛教大学、一九七二、二五九―二六〇頁。
- (66) 前掲注(28)、一二〇頁。

(67) 右同、一二五頁。

(68) 右同。

(69) 前掲注(65)、一四二―一四三頁。『鹿溪』創刊号(鹿溪会、一九一〇)をみると、羽田は「迦膩色迦王の年代に就いて」と題する論考を寄せている。また赤松智城は同書第四号に「戦争と宗教」という論考を掲載している。

(70) 京都大学読史会編「昭和期」(『回顧五十年』一九五九)、三頁。

(71) 右同、一三―一四頁。

(72) 『摩訶衍』第三卷第二号、一九二、一二五頁。

(73) 『史林』第九卷第一号。

(74) 『史林』第十卷第一号。

(75) 前掲注(73)。

(76) 前掲注(74)。

(77) 『史林』第十四卷第二号。

(78) 前掲注(60)。

(79) 右同及び前掲注(1)柴田氏論考、四五頁。

(80) 右同および前掲注(1)、蘇理氏論考。

(81) 肥後和男「大正十三年の頃」(『国史学研究室通信』二二号、一九三五)、九―一〇頁。

(82) 右同。

(83) 金曜会から京都帝国大学民俗学会までの道程などについては、前掲注1、蘇理氏論考が先駆的研究としてあげられる。金曜会から民俗談話会、民俗研究会、京都帝国大学民俗学会においても西田は指導的役割を果たしている。民族談話会発足のおり、中心メンバーであった水野清一は、西田が進んで指導するといった姿勢に対して、会員みな喜んでいと書き記している(『民族』第三卷五号、一九二八)。

(84) 前掲注(81)。



- (85) 佛教大学宗教文化ミュージアム所蔵。
- (86) 前掲注(1)、蘇理氏論考参照。
- (87) 前掲注(8)、拙稿参照。
- (88) 財団法人服部奉公会編『研究抄録』二号(財団法人服部奉公会、一九三二八頁。
- (89) 右同。
- (90) 『ドルメン』第三卷第三号、一九二四。
- (91) 佛教大学宗教文化ミュージアム所蔵。
- (92) 右同。
- (93) 前掲注(3)、菊地氏論考。および福知山市教育委員会編『福知山市北部地区緊急民俗調査報告書』(福知山市、二〇〇〇)。
- (94) 前掲注(60)。
- (95) 伊藤幹治「宇野円空」(日本民俗文化体系(11)『内藤湖南 宇野円空』講談社、一九七八、二五三頁。